

序

道は則ち高し、美し、約なり、近なり。人徒其の高く且つ美しきを見て以て及ぶ可からずと為し、而も其の約にして且つ近、甚だ親しむ可きことを知らざるなり。富貴貧賤、安樂艱難、千百、前に変ずるも、而も我は之を待つこと一の如く。之に居ること忘れたるが如きは、豈約にして且近なるに非ずや。然れども天下の人、方且に富貴に淫せられ貧賤に移され、安樂に耽り艱難に苦しみ、以て其の素を失いて自から抜く能わざらんとす。宜なるかな、其の道を見て以て高く且美しくして及ぶ可からずと為すや。孟子は聖人の亜、其の道を説くこと著明にして、人をして親しむ可からしむ。世蓋し読まざるものなし。讀みて道を得たる者は或は鮮し。何ぞや。富貴貧賤、安樂艱難の累わす所と為りて然るなり。然れども富貴安樂は順境なり。貧賤銀難は逆境なり。境の順なる者は怠り易く、境の逆なる者は励み易し。怠れば則ち失い、励めば則ち得るは、是人の常なり。吾、罪を獲て獄に下り、吉村五明・河野子忠・富永有隣の三子を得、相共に書を読み道を講じ、往復益々喜ぶ。曰く「吾と諸君と其の境は逆なり。以て励みて得ること有る可きなり」と。遂に孟子の書を抱きて講究龔磨し、以て其の所謂道なる者を求めんと欲す。司獄福川氏も亦来り会して「善し」称す。是に於て悠然として楽しみ、莞全として笑い。復園牆の苦たることを知らざるなり。遂に其の得る所を録し、号して『講孟筭記』と為す。夫孟子の

説は、固より弁ずることを待たず、然れども之を喜びて足らず、乃ち之を口に誦し、之を誦して足らず、乃ち之を紙に筆するも、亦情の已む能はざる所なれば、則ち『筭記』の作は、其れ廢す可けんや。抑々聞おもく、往年獄中政なく、酒に酤くし、氣をして喧けん厖かい紛争して、絶えて人道なからしめたりと。今公の位に即くや、庶政更張し、延ひきて獄中に及び、百弊日に改まり、衆美並びに興る。蓋し司獄も亦与りて力あり。今乃ち諸君と悠々として学を講じ、以て其の幽囚を楽しむことを得る者は、寧なんぞ対揚する所以を思わざる可けんや。

安政乙卯秋日、二十一回藤寅、諸これを野山の獄の北房第一舎に書す。